



Title	[書評] イチロー・カワチ (KAWACHI, I.)・等々力英美 (TODORIKI, H.) 編 『ソーシャル・キャピタルと地域の力: 沖縄から考える健康と長寿』
Author(s)	山城, 新
Citation	International journal of Okinawan studies, 4(2): 84-87
Issue Date	2013-12-30
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/43628
Rights	

[書 評]

イチロー・カワチ (KAWACHI, I.)・等々力英美 (TODORIKI, H.) 編
『ソーシャル・キャピタルと地域の力：沖縄から考える健康と長寿』

日本評論社 2013年 239ページ

山 城 新*

メディアを中心とする「沖縄ブーム」の隆盛と重なって、2001年に出版された *The Okinawa Program* (邦訳『オキナワ式食生活革命——沖縄プログラム』) によって沖縄の健康と長寿の老年学的知見は、健康長寿県としての沖縄のイメージとして広く人口に膾炙した。しかしながら、既に *The Okinawa Program* が示していたとおり、当時から沖縄における健康と長寿は「26ショック」として形容される危機的な状態であり、改善されなければならない社会的課題であった。本書『ソーシャル・キャピタルと地域の力』が射程として設定するのは、いわば、*The Okinawa Program* 以後の沖縄県民の具体的な健康についての具体的考察と検証、そしてその際に人間の関係性の濃淡がどのように健康状態と影響しているかというソーシャル・キャピタル概念の応用、そしてその結果として示されるこれからあるべき研究の方向性と保健行政ならびに社会政策的可能性の提示である。アメリカ文学と環境思想を研究する評者として、本書の個別の議論を精査できる立場にはないが、以下本書で印象深かった章の概要を紹介しつつ、沖縄研究書として本書で示される沖縄像について以下に考察してみたい。

編者の一人であるイチロー・カワチによる序章の「高齢社会におけるソーシャル・キャピタル」では、「社会経済的地位」が健康と長寿を維持する為の主要な要因の一つであることが紹介されつつ、沖縄の特殊性が概説される。すなわち、経済的に恵まれていない沖縄で健康と長寿が良好に維持されてきた理由について問題提起しつつ、その考察の端緒として、島嶼地域としての沖縄で培われてきた独特の社会的文脈が重要であるとし、更にソーシャル・キャピタル研究の意義が説明される。後半は日本と沖縄におけるソーシャル・キャピタル研究の意義と展望が交互に述べられるため、沖縄社会とソーシャル・キャピタルの関連性は部分的にしか示されていないが、ソーシャル・キャピタル研究の先導者の一人として知られる研究者によって本書の総論的概要が示されている。

第1章「ソーシャル・キャピタルと高齢者の健康」と第4章「経済格差とソーシャル・キャピタル」は序章で紹介されたソーシャル・キャピタルと健康をめぐる研究の詳しい動向、政策への応用例、そして今後の研究課題が示されており、日本におけるソーシャル・キャピタル研究の概要に興味がある者にとっては示唆的であろう。特に、地域医療や医療政策の課題に関連する著作の多い近藤克則の第一章では、超高齢社会における健康の問題とソーシャル・キャピタル研究の概要だけでなく、島嶼地域におけるソーシャル・キャピタルと医療システムとの関連性の検証、更に今後のソーシャル・キャピタル研究の課題と展望まで具体的に鳥瞰されている。一方、第4章を執筆している稲葉陽二もソーシャル・キャピタル論を専門とする研究者であり、経済格差と人間関係、社会、あるいは健康の安定性がどのように関係するののかを実証的に示そうとする。稲葉

* 琉球大学准教授 Associate Professor, University of the Ryukyus

は「ソーシャル・キャピタル」ではなく、「社会関係資本」を用語として同義的に用いながら、高齢者に限らず、成人層すべてを対象にソーシャル・キャピタルと経済的格差との影響関係を更に仮説として3つに類型化しながら解説している。

編者の一人である等々力英美による第5章「戦後沖縄の体重転換と社会経済的要因」、ガイ・ベックマンによる第6章「沖縄男性の平均寿命の相対的低下をどのように説明するか」、大屋祐輔による第7章「沖縄のソーシャル・キャピタルと疾病の変遷」は、それぞれ沖縄に具体的に焦点を絞って研究課題を扱っている。等々力は20世紀に沖縄が経験した栄養転換と疾病形態の相関を観るために戦前、戦後、現在の3つの時代区分による変遷を示し、戦前と戦後世代の間に際立つ社会経済構造の変化が脂質摂取量の変動と同調し、結果的に両世代間の平均寿命の差として現れたと実証的に論じている。第6章と第7章はともに沖縄の戦後世代の男性の健康状態と生活環境の相関性を具体的に分析している。ベックマンによる第6章では、第5章で説明された栄養転換の構造分析を更に国際的な研究結果を援用して論じている点、及び、疾病のみを健康の障害に限定するのではなく、自殺を含めて生き方の局面で様々な遭遇する困難さと生活習慣パターン変化が健康問題にどのように作用しているかという大局観を提示する点で発展的な論考になっている。第7章において大屋は沖縄で「26ショック」として知られる平均寿命の全国順位が低下した現象を、沖縄の年齢層ごとの死亡率データを詳細に示しつつ、いわゆる沖縄県民の「今際」の特徴をいくつか示しながら今後必要な調査研究の方向性を提示している。その中で、例えば、生活習慣とソーシャル・キャピタルの相関関係を示すデータとして虚血性心疾患や脳血管疾患の発症と死亡、あるいは、自殺やアルコール性の要因がしばしば関連する慢性肝炎、肝硬変の発症を重要な指標として挙げているが、具体的なソーシャル・キャピタルとの相関性分析については今後の課題としている。

高倉実による第8章「沖縄における青少年の危険行動とソーシャル・キャピタル」と白井こころによる第9章「沖縄共同体社会における高齢者とソーシャル・キャピタル」は医学的な知見に基づく研究よりもソーシャル・キャピタル自体の考究にそれぞれのやり方で傾注している。高倉は先行研究で欠落していた若年層のソーシャル・キャピタルの評定と健康への影響分析を補うべく、類比する先行研究アプローチへの批判的検討を加えつつ、自らの収集したソーシャル・キャピタルと危険行動に関する横断調査データを提示しながら、学校環境が若年層のソーシャル・キャピタル醸成の場として肝要であることを実証し、今後の研究の更なる方向性を示している。白井は、社会経済的格差と健康の間の負の因果性を緩和し、同時に健康と長寿を維持させるような「何か」がソーシャル・キャピタルに内在すると推察する。その実証データとして模合と南城市の健康受診に関連する要因を提示しつつ、沖縄の高齢者を中心としたソーシャル・キャピタルを素描し、地域資源としてのソーシャル・キャピタルの有用性が、高齢者の健康福祉を維持することにも貢献し、更には地域社会とその構成員全員の将来の展望を拓く可能性を秘めていると論じる。

その他、第2章「食環境と食習慣——日本人若年女性を例にして」と第3章「ソーシャル・ネットワーク——認知症予防の観点から」の各章においては、若年女性の食習慣と認知症予防の為の高齢者といった限定的社会集団にまつわるソーシャル・キャピタルの研究事例が列挙されており、沖縄地域における今後の関連研究課題を考える点で示唆的であろう。第10章と第11章は沖縄の地元の風習や伝承についてそれぞれの立場で報告がされており、全体をとおして様々な観点による沖縄の地域性を示そうとする編者の配慮を感じる。

本書の大まかな構成と特徴は以上のように概略できると思われるが、沖縄研究を扱うIJOSの書評として、更に〈沖縄〉との関連において本書の意義を考えてみたい。哲学者のハンス＝ゲオル

ク・ガダマーは「哲学と臨床医学」というエッセイの中で健康について「それは自己忘却という驚くべき存在である」と述べている(125ページ)。すなわち、健康は日常的には意識されないし、客観的にそれ自体として観察できるものでもない。対して、病気は何か欠損した状態を指し、健康な状態が露わになるのは、まさにその何か欠損した瞬間である。したがって健康は常態的には「自己忘却」され、実感としての健康状態とは常に遡及的に確認されることになる。近代科学的知や方法論を批判的に検討したガダマーの解釈論的立場からすると、科学的に健康を対象化するのには難しい。それはガダマーの言葉では同時に「存在」自体を指すからである。

実際に本書で扱われる健康概念も、個々の論文の温度差はありつつも、ガダマー的な生き方を対象にするような全体的視点によって表現されているような印象を持った。その理由は、例えば「ライフコース」という用語で健康概念が包括的に言及されている論考がある点、単なる予防医学的観点に止まらず、介護、リハビリテーション、福祉などといった観点でソーシャル・キャピタルの役割が言及されている点、更に、病院や医療施設に限定するのではなく、学校や日常社会空間における健康生活実践の意義も指摘されているからである。上述したガダマーの引用箇所と同じ文脈で以下のようにも述べられている。「健康は検査によって、それ自体として示されるものではなく、まさにそれからすり抜けていることによって成り立っている。」(125ページ)本書ではまさに日常的にも学問的にも「すり抜けて」しまう健康概念を多様なアプローチによって抽出しようと試みている点において、沖縄に限らず多くの地域の読者に示唆的であるはずである。副題や「あとがき」で編者の述べる「沖縄から」考え、日本を見るという表現は、そのような意図を含意しているに違いない。

ところで、本書評は、米軍普天間飛行場の名護市辺野古移設に向けた埋め立て案について仲井間沖縄県知事が承認するか否かが争点となっていた2013年12月に執筆している¹⁾。その状況を目の当たりにしながら、本書で示されるデータや考察が全体としてあぶり出すのは、米軍基地の存在が沖縄県民の健康と福祉に与える深刻な影響でもあったと読んだ。米軍基地の二次被害として「26ショック」を関連づけるのは、本書の主旨ではない。しかしながら、本書がどのように読まれ、どのような意義を持つのかという問題は——本書のテーマである「健康」という主題は人類に共通の課題であるという点で——読者それぞれがどのように当事者として沖縄の事例や自分自身それぞれの生き方を見つめ直し、活用できるかにかかっている。いわゆる沖縄ブームや健康ブームとして一過性の流行の中で読むときには憧憬的としての楽園的な沖縄であるかもしれないし、序章で用いられている表現を借りると一般的「人々の健康とウェルビーイングを改善できるかを知ることができる」為の「自然実験の場」であるかもしれない。本書によって示された方向性が今後どのような形で研究成果として発展し、更に沖縄社会の抱える課題に対する処方箋としてどのような効果を発揮するのか大いに期待したい。そして何よりその為には、本書で示される課題と方向性が当事者である沖縄の地域社会において積極的に受容され、自己検証と自己決定の糧として活用されることが必須であり、それは沖縄県民自身がどのように本書で示された課題を当事者として顧みることが不可欠である。

注

- 1) 平成25年12月27日、自らの公約である「県外移設」の主張は堅持するとしながらも、仲井真弘多知事は米軍普天間飛行場の移設に向け政府が申請した名護市辺野古沿岸部の埋め立てを承認した。

引用文献

- ハンス＝ゲオルク・ガダマー 『健康の神秘——人間存在の根源的現象としての解釈学的考察』（法政大学出版局、2006年）
- 北澤一利 『「健康」の日本史』（平凡社、2000年）